



本会名誉会員 長谷川武治先生は  
平成 18 年 8 月 6 日逝去されました。  
謹んで弔意を表します。  
日本微生物資源学会

# 長谷川武治先生 御略歴

## 1. 経歴

大正 3 年 (1914 年)	大阪において出生
昭和 14 年 (1939 年) 3 月	東京帝国大学農学部農芸化学科卒業
同年 4 月	(株)武田長兵衛商店 (現武田薬品工業株式会社) 入社
同年 12 月	兵役
昭和 21 年 (1946 年) 2 月	復員, 復職, (財)醗酵研究所へ出向
昭和 28 年 (1953 年)	主任研究員
昭和 36 年 (1961 年)	常務理事, 研究所長に就任
昭和 51 年 (1976 年)	研究所長退任
昭和 52 年 (1977 年)	常務理事退任, 理事就任
平成 18 年 (2006 年) 8 月 6 日	逝去

## 2. 政府委員, 研究・教育活動

昭和 48 年 (1973 年)	内閣資源調査会専門委員
昭和 43 年 (1968 年)	ICCC-1 組織委員会委員
昭和 44 年 (1969 年)	日本学術会議生物科学研究連絡委員会微生物分科会委員
昭和 46 年 (1971 年)	東京大学応用微生物研究所講師
昭和 47 年 (1972 年)	ユネスコ微生物学国際大学院研修講座講師
昭和 57 年 (1982 年)	理化学研究所微生物系統保存施設顧問

## 3. 学会活動

昭和 40 年 (1965 年), 昭和 48 年 (1973 年)	日本農芸化学会 理事
昭和 50 年 (1975 年)	同会 副会長
昭和 48 年 (1973 年)	日本微生物株保存連盟 (現日本微生物資源学会) 副会長
昭和 50 年 (1975 年)	同連盟 会長
昭和 58 年 (1983 年)	同連盟 幹事
昭和 51 年 (1976 年)	世界微生物株保存会議 副会長
昭和 44 年 (1969 年)	日本醗酵工学会 (現日本生物工学会) 理事
昭和 50 年 (1975 年)	同会 評議員
昭和 40 年 (1965 年)	日本菌学会 評議員
	日本微生物資源学会 名誉会員
	日本農芸化学会 終身会員
	日本菌学会 名誉会員

## 4. 受賞・叙勲

昭和 45 年 (1970 年)	日本農芸化学会 鈴木賞 (酵母の分類学に関する研究と微生物株保存事業の育成)
平成 5 年 (1993 年)	勲四等瑞宝章叙勲

# 長谷川武治先生を偲び

Obituary: Dr. Takeji Hasegawa (1914–2006)

本会名誉会員長谷川武治先生は、病氣療養中のところ平成 18 年（2006 年）8 月 6 日 92 歳の生涯を閉じられました。ここに深く哀悼の意を表します。

先生は、大正 3 年（1914 年）12 月 10 日大阪でお生まれになり、昭和 14 年（1939 年）3 月東京帝国大学農学部農芸化学科を卒業されました。同大学においては坂口謹一郎教授のもとで、醗酵学を専攻され、卒業後（株）武田長兵衛商店、現在の武田薬品工業株式会社に入社されました。入社後、ただちに軍務に就かれ、中国大陸で終戦を迎え、昭和 21 年（1946 年）帰国、復職され、（財）醗酵研究所に出向、微生物の研究に従事されました。

先生は、早くから微生物株保存事業の重要性を認められ、終戦間もない昭和 26 年（1951 年）の日本微生物株保存機関連盟（現在の日本微生物資源学会）の設立に参画され、その後、本連盟の会長、副会長、幹事としてわが国の微生物株保存事業、カルチャーコレクションの育成に多大の貢献をされました。また、日本微生物株保存機関連盟を日本微生物株保存連盟に発展させ、それまで本連盟の会員が、限られた機関だけであったものを、広く個人会員にまで幅を広げ、わが国のカルチャーコレクションの充実を図られました。さらに、先生は、国際的にもカルチャーコレクションの発展に努められ、昭和 43 年（1968 年）10 月、東京で開催された第 1 回世界微生物株保存会議の実現に尽力され、その成果は、先生の編集による 600 頁をこえる議事録として残されております。また、昭和 51 年（1976 年）から昭和 56 年（1981 年）まで、世界微生物株保存連盟副委員長として活躍され、昭和 56 年（1981 年）7 月、チェコスロバキア（現チェッコ共和国）ブルノーで開催された第 4 回世界微生物株保存会議の議長としてこの会議を成功に導かれました。

また、先生は、達意の文を書かれ、1975 年改正国際細菌命名規約の翻訳にあたり、詳しい注釈をされ、またお一人で訳された部分もありました。後年、1990 年版の翻訳では先生の訳をそのまま使わせていたところもあります。先生のご執筆によるわが国のカルチャーコレクションの歴史は、今後われわれが後世に伝えねばならない貴重な記録であります。先生は、微生物学の歴史にも詳しく、日本醸造学の黎明期、麹菌の学名の由来など示唆に富む論文を発表されました。

先生は、財団法人醗酵研究所の所長として、当研究所が世界有数の研究所として発展するよう努められました。醗酵研究所の菌株カタログは世界に行き渡り、醗酵研究所の菌株は微生物学の進歩に、微生物産業の発展に大きく貢献しております。IFO と名付けられた醗酵研究所の菌株は、微生物の研究にたずさわるものにとって、いまなお身近な存在であります。

先生が、所長当時、醗酵研究所の「醗」の字が当用漢字にないので、「発」の字を使うよう財団の監督官庁から指示され、醗酵研究所と改めねばならなかったことをよく話しておられました。醗酵という長い歴史のある言葉を発酵に変えねばならなかったことは、文学に造詣の深かった先生にとって、なんとも納得できないお気持ちであった、と推察いたします。

昭和 29 年（1954 年）、国内の保存微生物株の性状を確かめ、その分類方法の研究を行うことを目的として、当時の東京大学応用微生物研究所の坂口謹一郎教授を委員長とする大規模の総合研究が組織されました。その課題名は「国内保存微生物株の分類及び整備に関する研究」であります。この総合研究はその後も続き、通年 11 年に及び、延べ 100 人もの研究者が参加しました。

長谷川先生は、その中で *Rhodotorula* を中心とする赤色酵母の分類・同定を担当されました。先生が、赤色酵母を分担されたのは、酵母の中で残ったのがこの属だけだったからだ、とよく話しておられました。その結果、*Rhodotorula* の新しい分類を提案されました。さらに、同一起源の菌株であっても、その性状が原報と著しく異なる菌株があり、それがカルチャーコレクションの保存状態によることを見いだされ、菌株保存の重要性を訴えられました。ちなみに、*Rhodotorula* の研究は、坂野 勲博士の世界最初の担子菌酵母 *Rhodospiridium toruloides* の発見につながり、また、現在広く用いられている飯島貞二博士の L-乾燥の開発に発展したものと思われます。

先生は、発酵研究所の方々の研究を指導されたのみならず、所外の若い研究者の指導にも当たられました。昭和 45 年（1970 年）東京大学応用微生物研究所非常勤講師、昭和 47 年（1972 年）ユネスコ微生物学国際大学院研修講座講師として、大学院生、留学生のカルチャーコレクション、微生物分類学についての教育に当たられました。

昭和 55 年（1980 年）理化学研究所の微生物系統保存施設の設立と発展に尽力され、昭和 57 年（1982 年）から当施設の顧問として、微生物株保存事業と微生物分類学の指導に当たられ、当施設の今日の基礎を築いてくださいました。

先生は、内閣資源調査会専門委員、日本学術会議生物科学研究連絡委員会微生物分科会委員、日本農芸化学会副会長、理事、日本醗酵工学会（現日本生物工学会）理事、評議員、日本菌学会評議員などの要職に就かれ、わが国の微生物学の発展に貢献されました。また、先生は、日本微生物資源学会名誉会員、日本農芸化学会終身会員、日本菌学会名誉会員であります。

昭和 45 年（1970 年）先生の「酵母の分類学に関する研究と微生物株保存事業の育成」と題する論文に日本農芸化学会から鈴木賞が授与され、さらに平成 5 年（1993 年）秋には勲四等瑞宝章叙勲の榮譽を受けられました。

先生は、磊落のご性格で、小さなことには拘泥されませんでした。しかし、あらゆることに行き届いた気遣いをされ、争いを好まず、周囲との調和を図られました。だれにでも明るく話しかけられ、適切な指導をしてくださいました。このことは、海外にも先生を尊敬する人たちの多いことから理解できるところであります。まさに、先生のご人徳を物語るものであります。

私たちは、先生が微生物株保存事業と微生物分類学に示された固いご意志と熱い情熱を体し、これからも、これらの分野の発展に努めなければならない、という思いを新たにします。

ここに先生のご冥福を心からお祈りいたします。

（駒形和男）